



平成 13 年 3 月 6 日

文化庁長官 佐々木 正峰 様

社団法人日本建築家協会(JIA)
関東甲信越支部支部長 服部 範二
保存問題委員会委員長 篠田 義男

旧東京大学生産技術研究所・東京大学物性研究所（旧歩兵第三連隊兵舎）
保存活用に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥の事とお慶び申し上げます。

貴文化庁は、市井にある歴史を経た建造物を文化財として登録する文化財登録制度を制定されるなど、都市における建築文化の発展継承に尽力されてこられました事に深く敬意を表します。又本会と、本会会員に格別のご理解を賜り厚く御礼申し上げます。

さて貴庁におかれましては、港区六本木に存在する旧東京大学生産技術研究所・東京大学物性研究所（旧歩兵第三連隊兵舎）を、ナショナル・ギャラリーに改築することになり、実施に向けて計画を推進されているとお聞きしております。

この建築は、旧歩兵第三連隊兵舎として関東大震災直後の 1928 年（昭和 3 年）に建てられ、当時「模範兵舎」といわれた合理的なプランと、整然と並べられた窓の連続する簡明な立面を持つ重要な歴史的建築物と思われます。

建築の存在は多くの場合「物語性」を持ち、時間を経るにしたがい人々の中に忘れ得ない記憶となつて受け継がれていくものですが、この建築も 2. 26 事件（1936 年）の舞台となり、日本の歴史の上での大きな記憶の存在となったものと言えます。この建築は、東京の景観の一部として人々のイメージの中に定着しつつ、それ自身が実在の建築史であり続けるような、この種の建築がなくなった今日、特筆すべき貴重な存在とも言えます。

又 20 世紀後半より、自然環境と建築の関わりが大きな問題となってきました。とりわけ解体によるスクラップ材の処理の問題は、環境に対する大きな影響力を持つものと認識されるようになり、可能な限り現存する建築物を使い続け、あるいは再生する事が、環境の持続的な安定の為の大きな力になりうる事の重要性がますます高まって参りました。そしてそのような手法によって再生された建築が、時間を経た材料や意匠を取り込むことにより、大変魅力的な空間に再生され、見事な建築として蘇った事例が、ロンドンの火力発電所を再生したテート美術館の成功例など世界の各地にいくつも生まれてきています。

本建築は既にプロポーザルによって設計者が選定され、現在基本設計がなされていると聞き及んでいます。その後の進行状態を存じ上げませんのであるいは時期を逸した要望になるかも知れませんが、幸いこの建築は日の字のプランのため、中庭に屋根を掛けたりする事により大空間を作ることも可能であると思われ、ギャラリーとしての再生に対してもかなりの自由度が有るものとも思われます。このような点を勘案し、この建築を生かしながら再生させる手法を是非検討され、歴史的建築を複合した、全く新しい建築の魅力を世に問うナショナル・ギャラリーとされる事を強く要望します。

敬具